HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	香港における高齢者の主観的ウェルビーイングにおける宗教の役割 ： 貫道の高齢信徒へのインタビュー調査から
Author(s)	伍, 嘉誠; 寺沢, 重法
Citation	宗教と社会貢献, 5(1), 1-27
Issue Date	2015
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/58449
Rights	『宗教と社会貢献』（ISSN:2185-6869）は、創刊号より最新号まで 大阪大学学術情報庫 OUKA(Osaka University Knowledge Archive）にて全文公開いたします。
Rights(URL)	http://ir.library.osaka-u.ac.jp/web/RSC/index.html
Type	journal article
File Information	terazawa20150408.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	香港の高齢者の主観的ウェルビーイングにおける宗教の役割 : 一貫道の高齢信徒へのインタビュー調査から
Author(s)	伍嘉, 誠; 寺沢, 重法
Citation	宗教と社会貢献. 5(1) P.1-P.27
Issue Date	2015-04
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/51352
DOI	
Rights	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA
http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/

Osaka University

論文

香港の高齢者の主観的ウェルビーイングにおける宗教の役割

―一貫道の高齢信徒へのインタビュー調査から―

伍嘉誠[*]・寺沢重法[†]

The Role of Religion in the Subjective Well-being of Older Adults in Hong Kong

Interview of Elderly Yiguan Dao Elder Believers

NG Ka-Shing, TERAZAWA Shigenori

論文要旨

香港の高齢化率は 1987 年から 2013 年の間に 7%から 14%に上昇し、香港は高齢化時代に突入した。宗教が高齢化社会において果たす役割は無視できないが、香港の高齢者における、宗教と主観的ウェルビーイングの関連は十分に論じられていない。本稿では香港の一貫道の 14 人の高齢信徒へのインタビュー調査からこのテーマを論じる。対象者の語りからは、一貫道は高齢信徒にとって 1）死への恐れに対するコーピング機能、2）神仏による守護感覚、3）生き甲斐、4）社会参加の機会を提供する機能をもつ可能性が示唆された。この結果は、宗教と SWB、特に華人系宗教と華人社会における高齢者の SWB の研究に貢献するものである。

キーワード　香港、一貫道、主観的ウェルビーイング、高齢者、社会心理学

Population ageing is advancing rapidly in Hong Kong. Between 1987 and 2013, the percentage of the population considered elderly rose from 7% to 14%, indicating that the city is joining the ranks of the ageing societies. As an important component of society, the role of religion in responding to the challenges of population ageing cannot be ignored. However, we lack sufficient empirical studies on the role of religion in enhancing the well-being of old people in Hong Kong and the mechanisms involved in such processes. Based on a case study of Yiguan Dao and interviews with 14 elder members, this paper argues that religion is an important key to the subjective well-being of elders. It suggests that Yiguan Dao can be an effective resource for coping with the fear of death, as well as providing divine protection, a sense of purpose, and opportunities for social participation for elderly members. This paper contributes to the studies of the relationship between religion and SWB, especially in Chinese societies.

Keywords: Hong-Kong,Yiguan Dao, Subjective Well-Being, Older Adults, Social Psychology

[*] 北海道大学大学院文学研究科・博士後期課程 ngkashing@let.hokudai.ac.jp
[†] 北海道大学大学院文学研究科・助教 shterazawa@let.hokudai.ac.jp

1. はじめに

高齢化は香港における重要な社会現象である。1987 年から 2013 年の 31 年間における香港の高齢化率は 7%から 14%に上昇し、香港は高齢化社会に入った［香港政府統計處 2012］。2023 年には人口の約 20%が 65 歳以上の人口になると予想されている。政策レベルでは、香港政府は高齢化に伴って増加する社会福祉への需要を満たすための政策を重要課題とし、高齢退職者の生活保障を行うための枠組みも議論されている。

香港の高齢者が直面する問題は、家族や友人からの情緒的・道具的サポート、住宅問題、家計問題、介護者を得られるかどうかなど、個人およびコミュニティーの両方のレベルで生じうる［Siu and Phillips 2002］。こうした様々な問題は、高齢者の精神的健康に直接的に影響を与える可能性があり、日常生活において解決する必要がある。拡大家族の減少に伴って、高齢者が家族から十分なサポートを得られなくなると、こうした状況はより悪化する(1)。そうなると高齢者は各種ケアや社会生活の維持を家族以外の組織に頼る必要性が高まる。高齢者の精神的健康の悪化がもたらす最悪の結果は自殺である。香港賽馬會防止自殺研究中心［2014］によると、2012 年における 65 歳以上の自殺率は人口 10 万人あたり 25.4%であり、これは全年齢層の平均自殺率 12.7%の約 2 倍である。

後述するように欧米の宗教社会学では高齢者における宗教と健康（特に精神的健康）に関する多くの蓄積がある。しかしながら、香港において高齢者が抱える様々な問題に対して宗教がどのような役割を担いうるのかについてはあまり予測ができない。宗教的信念や宗教行動は高齢者の主観的ウェルビーイング（Subjective Well-Being 以下、SWB と略す）の資源となる可能性があるものの、香港において宗教が高齢者の SWB を高めているかどうか、高めているとすればいかなるメカニズムで高めているのかについては実証研究が十分に蓄積されていない。そこで本稿では、香港における一貫道の高齢「道親」（一貫道の信者のこと）を事例に、香港において宗教が高齢者の SWB とどのように結びついているのかを検討する。具体的には、後述するような、死への恐れに対するコーピング機能、社会参加といったものが SWB の高さと結びついているのだろうか。高齢道親は自らの SWB

を一貫道とどのように結び付けて理解しているのだろうか。こうした問いを本稿で検討したい。

本稿は以下のような点で、先行研究に新たな知見を加えるものと思われる。第 1 に、近年の宗教社会学では宗教と SWB に関する多くの実証研究が行われているが、アジア社会を対象とした実証研究は始まったばかりである。香港というアジア社会を対象とした本稿はこうした議論を拡大するものである。第 2 に、次章で詳述するように、香港は高齢化社会を迎えている。高齢者の SWB をどう高めるかという問題は重要なテーマである。欧米では高齢者の宗教と SWB の関連を論じた議論が行われているが、香港を含むアジア社会ではほとんど行われていない。本稿はこうした先行研究の空白部分をいくばくか埋めるものである。第 3 に、アジア社会を対象としたものも含め、宗教と SWB の研究の多くは、計量研究である。しかしながら SWB や宗教のような対象者の主観を扱う研究においては、質的なインタビューデータを検討する作業も重要である。また、香港のように豊富な計量二次データが蓄積されていない社会においては、計量分析自体に様々制約があり、質的調査から検討していく作業が不可欠である。第 4 に、本稿の事例である一貫道は、華人社会を中心に世界的に活動する重要な新宗教である。しかし、調査の難しさ故に一貫道の実証研究は限られている［Lu 2008］。本稿は、一貫道の数少ない事例研究の 1 つとしての意義ももちうる。

本稿の構成は以下の通りである。まず香港における高齢化の現状、および近年の SWB に関する議論を整理する。次に香港の一貫道の高齢道親を対象としたインタビュー調査の結果から、香港の高齢者における宗教と SWB の関係を分析する。一貫道の二つの「佛堂」（一貫道の施設）の調査に基づき、高齢道親が一貫道に参加することがどのように SWB の高さと結びついているのを論じる。以上の知見を踏まえた上で、高齢化する香港社会において宗教が高齢者の SWB に重要な役割を果たしていることを論じる。

2. 高齢者における宗教と SWB

2.1 宗教と SWB

SWB とは、自らの人生や生活を良いもの、幸せなものと捉える主観的な

評価である。SWB は人生や生活に対する感情的評価である「幸福感」と認知評価である「生活満足度」から構成される。SWB は人々の健康の重要な構成要素であるとして、近年盛んに研究が行われている［Diener 1984; Liao et al. 2005］。

宗教と SWB との間に統計的に有意なプラスの関連を見出した研究は少なくない［Ellison et al. 1989］。宗教と SWB の高さの関連についての説明として以下の 4 つが提起されている。

第 1 に、宗教を通じてストレスの多いイベントや状況への曝露を軽減するような健康行動やライフスタイルが獲得されるという説明である。たとえば宗教を通じて 1）飲酒や薬物乱用のような高リスク行動、逸脱行動が軽減される、2）家庭生活、結婚、子育てなどに対してより積極的な価値を見出すようになる、3）以上のようなライフスタイルを信者自らが選択するようになる、というメカニズムが想定されている［Levin and Vanderpool 1987］。

第 2 に、宗教的コミュニティーが社会的統合やソーシャルサポートの重要な資源となるというという説明である。宗教的な仲間と定期的に交流することで、価値観を同じくする人々との関係が形成される。多くの宗教は、高齢者や貧困者、野宿者などを対象とした各種サービスや宗教者によるカウンセリングなどを提供している。また宗教的な仲間同士で、物質的サポート（生活必需品など）、情緒的サポート（共感、傾聴など）、スピリチュアルサポートなどのインフォーマルなサポートが提供される。宗教を通じて形成される社会的統合には、苦しみや利他主義、互酬性に対する信念を共有することにより、より信頼できかつ満足のいくものとなる可能性がある［McIntosh and Alston 1982; Maton 1987; Maton and Rappaport 1984; Taylor and Chatters 1988］。

第 3 に、宗教は信者にとって重要な心理的資源（psychological resources）となるという説明である。たとえばあらゆる人々を無条件に愛し、気に掛ける神の存在を近くに感じることによって、自己効力感や自己統制感が高まる［Idler 1987; Watson et al. 1988］。

第 4 に、宗教的認知や宗教行動はコーピングのための重要な資源となるという説明である。宗教的なコーピングは、たとえば喪失体験、予期せぬ災害、健康上の問題を経験した人々にとって重要である。困難な状況に宗教的な意味づけを与えることで、ストレスが軽減し、困難な状況にポジテ

ィブな意味づけを与える［Foley 1988; Pollner 1989; Pargament 1997］。

2.2 高齢者における宗教と SWB

宗教が SWB とポジティブな関連をもつという議論は高齢者においても当てはまるものである。特に高齢者は、身体機能の衰えなどにより日常生活の様々な制約が多くなるため SWB が低くなる傾向にある。Cooper et al.［2009］は各ライフコースにおいて SWB に影響を与える重要な要因に「精神的資本」（mental capital）(2)があるとし、高齢期においては身体的機能のみならず、精神的資本が減少することを指摘する。高齢期における精神的資本の減少としては、老化や社会的弱者になることへの不安感や無力感、社会参加が困難になることによる孤独感や孤立感に加えて、配偶者や友人との死別や自分の死期も近くなることから生じる死への不安感も強まる。そして死といった究極的な関心の高まりに伴って、宗教的な関心も高まると思われる。

以上のことから、特に高齢者において宗教と SWB は重要な関連をもっている。たとえば親しい人の死を経験した高齢者は、人生における宗教の大切さを強く感じ、人生における宗教の大切さを強く感じることで、死への不安が弱まる［Krause 2011］。また高齢期においては宗教参加によって社会的統合やソーシャルサポートが高まり、その結果、孤独感が軽減する［Rote et al.2012］。また宗教的な音楽を聴くことが、生活満足度やセルフエスティームの高さ、不安感や抑うつ感の低さと関連している［Bradshaw et al.2014］。さらに宗教参加や祈りを通じて、友人との交流頻度や神の存在を感じる頻度が高まり、その結果、自分が頼りにされているという感覚が高まること、そしてこの関連は女性や低階層者、アフリカ系アメリカ人など社会的に弱い立場の高齢者において特に明確に見られる［Schiman et al.2010］。

香港については、筆者らは 2013 年実施の世界価値観調査（香港データ）を確認した（http://www.worldvaluessurvey.org/wvs.jsp、2015 年 2 月 13 日閲覧）。SWB の下位尺度である「主観的幸福感」（質問文は「全般的にいって、現在、あなたは幸せだと思いますか、それともそうは思いませんか。(問 2)」であり選択肢は「1：非常に幸せ」「2：やや幸せ」「3：あまり幸せでない」「4：全く幸せでない」「4」が「非常に幸せ」、1 を 100、2 を 75、3 を 50、4 を 25 に変換した）の平均値を所属団体別で比較した。結果は表 1 の通りであ

る。

表 1　団体所属と SWB（世界価値観調査香港データ 2013 年）

	宗教団体と世俗団体	宗教団体のみ	世俗団体のみ	所属なし
65 歳以上（72 人）	79.2（6 人）	65.3（5 人）	76.5（17 人）	77.3（44 人）
64 歳以下（547 人）	78.1（40 人）	76.5（65 人）	77.4（94 人）	77.2（349 人）

この結果から香港の宗教団体への所属者が主観的幸福感の高さと関連し、高齢者では宗教団体と世俗団体の双方に所属することと主観的幸福感の高さの関連が比較的顕著である傾向が見受けられる。香港の高齢者における宗教と SWB の結びつきを検討することが重要であると思われる。

Boey［2003］は女性高齢者（180 人、平均年齢 72 歳）の地域サンプルの分析から以下の知見を得ている。1）カトリック信者と仏教徒は SWB が高く、家族サポートと身体的健康が両者を媒介している可能性がある。2）信仰が癒しの源泉となっているという主観的感覚、および信仰が困難な状況を助けてくれるという主観的感覚が、SWB の高さと有意に結びついている。

重要な研究だが、他の宗教（道教や一貫道など）と SWB の関係や他の宗教性（宗教参加頻度、宗教的ネットワークなど）と SWB の関係については検討されていない。

3. 香港の宗教状況・調査対象・調査方法

3.1 香港の宗教状況と調査対象

香港では一貫道を調査事例とする。まず議論の前提として、香港の宗教状況を概観する。

香港の主流宗教は仏教、道教、儒教である。香港に仏教が伝来したのは魏王朝時代であり、20 世紀までまとまった仏教団体が形成されたことはなかった。1940 年時点で香港には約 100 箇所の寺院があり、仏教徒は約 10 万人存在したと言われる。第二次大戦後に仏教団体が形成され、現在は香港仏教聯会が香港最大の仏教団体として多くの傘下寺院をもつ。現在、僧侶信者を含め約 10 万人の仏教徒が存在する。道教については約 300 箇所の道

観がある。運営主体は個人、地域組織、政府など様々なである。香港道教聯会が香港最大の道教団体であり、多くの道観はこの傘下にある。道教の信者数は数万人と言われる［Irons and Melton 2008：125］。なおこれらについては明確な教団所属を前提とせず、祖先供養や祭りなどの伝統行事として行われる場合も少なくない。

キリスト教については、カトリックの伝道が 1841 年に開始し、1946 年に香港教区となっている。2013 年時点で約 37 万人の信者がいるとされる。プロテスタントの伝統は 1842 年に始まる。香港教会更新運動の 2009 年の調査によると、洗礼者は約 47 万人である。教派数は約 50 箇所、教会数は約 1400 箇所、聖書学校等は約 2500 箇所である［Irons and Melton 2008：39-41］。

これらの他にも、香港には創価学会、幸福の科学、一貫道、法輪功、サイエントロジー、バハイ教などの新宗教、イスラム教、ヒンドゥー教、シク教、ユダヤ教なども存在する。

以上の中から、本稿では一貫道を取り上げる。理由は以下の 6 つである。第 1 に、一貫道は相対的に高齢者世代に受け入れられているためである。著者が観察をした限りでは、一貫道の諸活動の参加者の 7〜8 割近くが高齢道親であった。そのため一貫道はその教説や実践において高齢者層と親和的であると考えられる。この点については、教団組織のリーダーから、現在は高齢道親が多く、若年層道親が少ないというという話を伺っている。また一貫道は華人の民間信仰との連続性が強いため、様々な民間信仰を実践する高齢者に親和性が高いと推察される。

第 2 に、一貫道は儒教や道教、仏教、シャーマニズムなどの様々な宗教を取り入れた宗教である。そのため扱う宗教の範囲が広く、加齢に伴う様々な困難に対処するための資源を提供していると考えられ、一貫道のみならず宗教一般と高齢者のニーズの関係を探ることも可能である。

第 3 に一貫道は華人社会で急成長する宗教であり、特に台湾［Jordan and Overmyer 1986; Lu 2008］やマレーシア［Soo 1997］の一貫道については実証研究が行われているものの、実証研究は必ずしも多くない［Soo 1997］。しかもその多くは教団史や教義に関する研究である。一貫道の高齢者の活動状況に焦点を当てた本稿はそうした限界を乗り越えるものである。

第 4 に、本稿で取り上げる 2 つの佛堂は、基礎組に属し、一貫道の 18 の組の中で最大規模のものであり、香港における一貫道の発展の重要な側面

を捉えることができると考えられる。

第 5 に一貫道は他の宗教（無宗教も含む）に比べて高齢者の SWB の高さと関連する傾向が確認されたためである。たとえば筆者ら台湾の社会調査データ（2009 年実施の「台湾社会変遷基本調査」宗教・文化モジュール）を用いて、SWB の下位尺度である「主観的幸福感」（設問は「最近の日常生活全般について、あなたは幸せですか、それとも不幸せですか？」で、選択肢は「1：とても幸せ」「2：まあまあ幸せ」「3：あまり幸せで無い」「4：まったく幸せでない」であり、1 を 100、2 を 75、3 を 50、4 を 25 に変換した）の平均値を宗教別で確認した。結果は表 2 の通りである。

表 2　宗教と主観的幸福感（台湾社会変遷基本調査 2009 年）

	一貫道	仏教	キリスト教	道教	民間信仰	無宗教
65 歳以上（290 人）	81.3（4 人）	80.3（68 人）	78.1（16 人）	77.3（32 人）	75.5（144 人）	76.0（26 人）
64 歳以下（1553 人）	76.7（29 人）	76.2（310 人）	77.8（89 人）	77.0（227 人）	75.9（677 人）	76.6（221 人）

一貫道のケース数は全体の約 2%程度であるため、結果が不安定になっている可能性もあるが、高齢者においては他の信仰と比較した場合、一貫道と SWB の結びつきが相対的に明確である可能性が示唆される。

なお表 1 は香港のデータだが、香港のデータには選択肢に一貫道が含まれていないため、表 2 のデータは台湾のデータを傍証として使った。また両データでは設問自体が異なっている。表 1 では「所属団体別」では「宗教団体のみ所属」において高齢者の方が SWB は「低い」一方、表 2「宗教別」では、65 歳以上の高齢者の方が SWB は「高い」という矛盾した結果が出ているが、これはこうしたデータの違いによる部分が反映されていると考えられる。また表 2 では仏教の 65 歳以上の SWB が高い。台湾の場合、慈済会などの社会参加型仏教の影響力が強く、そうした仏教団体の活動に参加することと関係があると推察される。

最後に、従来、高齢者と SWB の関係を論じた研究の多くは、欧米のキリスト教の議論が中心であるが［Ellison et al. 1989］、華人社会を論じた研究は数少ない。特に高齢者の宗教と SWB を結び付けることが指摘される「健康行動」、「社会的統合」、「心理的資源」や「コーピング」などのメカニズム

について華人社会では十分検討されていない。本稿は華人社会である香港を取り上げ、華人系宗教である一貫道と高齢者を着目する事によって、従来の欧米社会を中心の「宗教と SWB」の研究を補うものである。また従来の研究とは異なる地域・社会の実証研究を進める上では質的研究によって事例・文脈を把握することが重要である。

3.2 一貫道の概要

一貫道は 1905 年に劉清虚によって中国大陸で創設されたと言われるが、その思想的起源は 15 世紀の羅教に遡り、また組織的起源は 18 世紀の先天道に遡ることができる。1949 年の中華人民共和国建国にともなって、一貫道は弾圧を受けるようになり、多くの指導者や信者が、共産党の支配の及ばない台湾や香港に移転した。台湾でも国民党による弾圧を長らく受けたものの、1987 年の戒厳令解除以降はその活動が認められている。台湾と香港の両地域は、一貫道の発展において大きな意味をもつ地域とされている。正確な信者数は不明だが、欧米諸国や南アジア、日本などにも拠点があり、その信者は各地域の華人に留まらないとされる。

一貫道では、全ての生き物は無生老母によって創造され、修道を通じて無生老母に戻るとされる(3)。一貫道は、組織としては「宗教」であることを否定し、道を求める道親達の集団であると認識している。一貫道の教説には華人系宗教・思想（儒教や道教）のみならず、他宗教（仏教、キリスト教、イスラム教）も含まれているとされる。道親にとってこうした様々な宗教を学ぶことが重要である。

また、一貫道は菜食主義を特徴とする。全ての生き物は尊重されるべきであり、肉食は動物の生命に害を及ぼすのみならず、個人および社会全体の悪い業（karma）を蓄積する。そして悪い業は個人と文明の両方にとって禍となる。一貫道では輪廻転生も説かれ、輪廻転生から解脱するには、悪い行いをやめ、菜食を通じて良い行いを蓄積する必要があるとされる。

「得道式」（一貫道に入門することを「得道」と呼び、その儀礼を「得道式」という）は弥勒仏の像の前で行われる。「点伝師」（得道の際の導師）は無生老母から得道希望者に道を渡す。一貫道で得道を受けることを「自分の名前を地獄から引き取り、天国に付ける」(4)といわれる。

得道式を受けると「三寶」(*sanbao*)を授かる。三寶を用いると、神々から

の助けを得、災いを解決できる。1 つ目の三寶は「玄關」(*xuanguan*) であり、これは人間の額にある魂が入る門である。2 つ目の三寶は「無字真經」(*wuzizhenjing*)という呪文であり、これを唱えることで神や仏に合図が届く。3 つ目の三寶は「合同」(*hetong*)という、両手で作る印契であり、99 個の危機を回避する力がある［Chen 2008：28］。

3.3 香港の一貫道

1949 年以降、一貫道の香港での活動が本格化するが、人的、経済的資源の不足により、しばらくの間、活動は困難な状況に置かれた。1950 年代に一貫道は正式に登録された［Soo 1997：1］。1980 年代の佛堂数は約 300 箇所、道親数は約 5 万人とされる［中華民國一貫道總會 1998：3］。1997 年の香港返還が近くなると、かつて香港に逃れてきた道親と点伝師は、共産党による弾圧が復活することを恐れ、欧米諸国の華人社会での布教活動に力を入れ始めた。実際に香港返還後は、少なからぬ道親と点伝師がこれらの地域に移り、道親数と点伝師数、佛堂数が減少した。香港に残った佛堂では布教活動を抑えるなど、活動が目立たないようにした。布教活動が元通りになったのは、中国返還が宗教政策に大きな影響を与えないことが明らかになってきた 2000 年頃からである。現在香港には約 200 箇所の佛堂と約 5 万人の道親がいると推測される(5)［Ng 2014］。

3.4 調査方法および調査対象者

調査は以下のように行われた。第 1 著者が 2013 年 9 月および 2014 年 8 月に、新界・葵芳にある基礎組の佛堂で調査を行った。まず各種宗教行事やインフォーマルな集会への参与観察を行うとともに、佛堂の代表者や高齢道親に半構造化面接を行った。これらを通じて 1）一貫道の世界観や一貫道における宗教活動、2）佛堂に関する予備的情報を収集した。その上で、一貫道と SWB の関係を検討するために、スノーボール法で 14 名の高齢道親を選び、半構造化面接を行った。主な質問のトピックは 1）高齢期における関心事、2）一貫道への参加を通じてどのように満足感を得ているのか、である。このように参与観察とインタビュー調査を組み合わせることにより、一貫道と SWB の関係がよりよく理解できるものと思われる。調査は広東語で行った。調査対象者 14 名の基本属性は表 3 の通りである。

表 3　調査対象者の基本属性

仮名	年齢	性別	退職前の職業
王	69	男性	会社員
任	65	女性	縫製業
李	77	男性	会社員
楊	66	女性	清掃業
陳	66	男性	食品加工業
林	86	男性	警備員
潘	65	女性	貿易会社の事務員
石	81	女性	縫製業
張	87	女性	飲食店従業員
郭	65	男性	公務員
白	73	女性	食料品店従業員
譚	67	女性	店員
徐	70	男性	施工業
梁	65	女性	事務職員（会計）

4. 調査結果

インタビューデータからは、1）死後の世界、2）神仏の守護、3）生き甲斐、4）ソーシャルサポートの 4 つが対象者の主たる関心事であることが浮かび上がった。これら 4 つを軸に以下で調査結果を検討する。インタビューを引用する際には、読みやすさを考えて改変を行っている。

4.1 死後の世界

Cooper et al.［2009］は、死に対する恐れと死後の世界への不確実性が、高齢者における主要なストレス要因であると指摘する。インタビュー調査でも、これらに対する不安が語られる。だが、一貫道によって死後の世界が約束されていることは、高齢者の死に対する恐れやストレスを軽減しているようである。たとえば、王氏はインタビューの中で肝機能障害を抱えていることを打ち明けつつ、以下のように語る。

> 誰もが死にたくないと思い、誰もが長く健康に生きたいと願っている。けれども、死そのものは決して何か否定的なものと考えるべきではないと思う。道を得た人は、死んだあと無生老母のもとに戻る。「世俗の世界」で迷子になった子供が、帰る家を見つけるようなものだ。そこではすべてが完璧な状態である。だから、私は、無生老母を信じ

て、良い行いをしている限りは、死は怖くないと思っているし、死んだ後は無生老母のもとに帰れると思っている。実は、私は肝機能障害と診断されている（沈黙）。あとどれだけ生きられるかわからない。でも無生老母が見守っていて下さるから、できるだけのことはしていきたい。この世を去るとしても無生老母が待っていて下さる。この世よりも完全な「帰る家」のことを考えれば、心は平安だ。

肝機能障害は王氏にとって大きな脅威であり、肝機能障害を抱えながら生きられるかどうかは大きなストレスとなる。死の可能性に直面した時には、一貫道の教説に立ち返り、無生老母の元で暮らせるよう願う。王氏は、修道を続けると家に帰れることを信じている。

任氏は縫製業を辞めたのち、1990 年代に道親になった。一貫道で得道を受ける以前は、各種民間信仰を実践し、弥勒、観音菩薩、黄大仙人、媽祖、土地公、その他各種の神仏を信じていた。自身は迷信深い人間であり、熱心に神仏に参拝することが神の慈悲や良い未来を得る方法であることを信じている。一貫道に得道したのは、無生老母によって永遠の命が与えられるためであるという。

弥勒や観音菩薩の参拝という一貫道の実践を聞いたとき、とても良いと思った。弥勒や菩薩は良いことをして下さると信じている。守って下さる神様はたくさんいて、一貫道では弥勒や菩薩、いろいろな道教の神様を参拝する。だから一貫道で得道を受ければ、一度にたくさんの神様を参拝できると思った。得道を受けることで死から自由になれる。地獄に落ちるのではなくて無生老母のところに行ける。三寶を使うと無生老母のところに行けるだけではなくて、悪い未来も避けられる。だから、災害にあっても、怖がることはない。

一貫道の宗教的世界観が、ストレス要因や死に対してポジティブな解釈を与える可能性も示唆される。李氏は、ライフイベントの予測不可能性や不可逆性を「天理循環」という考え方で説明している。

年を取ることで弱くなるのは確かだ。若い頃はよくハイキングをしたのに、近頃は足がめっきり疲れやすくなった。でも、天理循環には逆らえない。生老病死はあらゆる生き物におとずれる。身体が衰える

ことを責めるのではなく、変えられないことを受け入れなければいけない。天理循環を受け入れて、前向きな気持ちで天理循環とともに生きれば、魂も磨かれ無生老母に近づくことができる。

輪廻転生に則れば、良い業を蓄積することで良い死後の暮らしを送ることができる。不殺生や菜食、援助行動などを通じて徳を積むことにより、死に対する恐怖感を効果的に減少させられる。楊氏は以下のように語る。

人助けは前世で行った悪事、たとえば人を傷つけたり、嘘をついたり、肉を食べたりしたことを償う機会である。悪い業を減らして、徳を積めるかもしれない。だから人には良くしたい。年上、年下の道親と一緒に高齢者施設に時々行く。募金をしているのを見ると、いくらか募金をしたくなる。人助けをすることで、少しずつ悪い業から離れて徳を積めるような感じがする。人助けは俗世で汚れた魂も浄化する大事な方法であり、それによって死後の世界もより良いものになる。

一貫道では、徳を積むことは過去の悪行を償い、来世のみならず現世における近い将来に対しても良い結果をもたらすとされる。このように、徳を積むことと輪廻転生を結び付けて解釈することで、否定的なものとして捉えられる死は、道親にとって必ずしも否定的なものではなくなる。

死の不可避性は、特に高齢者にとって究極的な関心事である。精神的・身体的状態の衰えと健康問題の増加は、生に疑問を抱かせる。来世が約束されることで、死や病気に対する否定的感情が軽減され、来世への希望をもつ。

4.2 神仏の守護

調査対象者の語りからは、神仏の守護が慰めと保護を提供することが示唆される。高齢者たちは、神仏が常に彼ら／彼女らを助け、困難が生じたときに守ってくれることを指摘する。たとえば陳氏は 1980 年代に得道を受け、2000 年代初頭に困難が生じたことで一層信仰心が高まったという。

10 年前に母が脳梗塞にかかった。心配だがどうすることもできなかった。母はずっと元気だったのに、どうしたのか。心配でどうしようもなかった。命は取り留めたものの半身不随になった。母は昏睡状態

> が長かった。私の妹は「もっと佛堂に行くべき時なのじゃないか？」という。他にどうすることもできなく、神様が母を救ってくれるという思いで、前よりも佛堂によく行くようになった。母はまだ治療が必要だけれども、病状は良くなり安定してきている。無生老母のおかげで、母の病気があってからというもの、道を授かれば、必ずしも良い経験をする必要はないということを悟った。むしろ、多くの困難に突き当たり、信仰が揺らぐかもしれないし、そのことで道を諦める人も多い。修道を続けていける人だけが無生老母とつながって神様に守ってもらうことができる。

陳氏によると、母の脳梗塞は母の前世の行いによって決められていた可能性があるが、彼と彼の母の強い信仰によって、無生老母から母は守られ病状も回復してきたという。楊氏も「得道式後、無生老母と私の魂がつながっている感じがした。無生老母はあらゆるものを平等に見て、守ってくれる」というように無生老母から守られていると語る。また「道親はいつも修道しなければならない。道徳的な人は神様に好かれ、無生老母に近づき、無生老母から守られる。」という潘氏の語りからは、陳氏と同様に信仰熱心さと守護感覚が結びつく様子がわかる。

林氏は「母と子供」のアナロジーによって、道親が無生老母と親子のような関係を感じていることを示唆する。

> 子供が母の愛のもとで幸せを感じるようなものだと思う。我々は無生老母のもとでは子供に等しい。無生老母や他の神様といることで癒されたり、守られているという感じがしたりする。無生老母が三寶をくださったのだから恐れることは何もない。三寶はとてつもない神通力だ。この神通力を使うと、危険や悪い未来から守ってくれる神様たちに囲まれているような感じがする。

林氏が用いた「母と子供」のアナロジーは、道親が無生老母と親子のような関係を感じていることを示唆する。また林氏は、困難時に三寶を使用することによって神仏に守護されている感覚が得られることを示唆している。

以上からは、一貫道を通じて、高齢信徒は、無生老母やその他の神格に

守護されているという感覚を得る。特に、三寶を使用することで、高齢信徒は神々によって、不幸や病気から守護されているという感覚を得る。

4.3 生き甲斐

高齢者が退職すると、生き甲斐を失い、次第に無力感を抱くようになる可能性もある。こうした状況は高齢者のSWBを低下させることに関連する。宗教にかかわることは、生き甲斐を見つけることにつながる可能性がある。一貫道についていえば、修道が生き甲斐の重要な要素となる。

多くの宗教では、信者に対して、道徳的な人間になるための道徳（徳目）を身に着けることを求める。一貫道でも、道親は儒教や道教、仏教を学習して魂を磨くことが求められる。たとえば、これらの学習を通じて道親は宗教的知識、より道徳的な性格や行動を身に着けられるため、学習は魂を磨くための重要な手段であるとされている。石氏は「聖人の得を知るために様々な古典の学習が勧められる。古典は智慧に溢れている。読むほどに興味がわくし、学習するほどに自分を省みるようになる。無生老母の子供として、学習することで道徳的な人間になっていく」と語る。

学習に加えて利他主義も一貫道の重要な要素である。援助行動で一貫道の教説を日常生活の中で実践することができる。一貫道における人助けは、仏教の「布施」や「慈悲」に相当する。実際に、道親は、一貫道の教説を実践に移すことは、大きな成長につながると考えている。援助行動を通じて達成感が得られ、人々とのつながりも得られるという。

たとえば張氏は、援助行動がいかに自分の生き甲斐になっているかについて以下のように語る。

> 弥勒や菩薩は慈悲深い。慈悲と三寶ですべての人を救ってくださる。人助けをすることで良い世界へ導かれるし、生き甲斐も得られる。人が困っている時に、助けてあげることは仏教の大切な行いだ。人を助けることで弥勒や菩薩になっていく。

一貫道では見返りを期待せずに援助行動を行うことが重要であり、私欲を離れることが弥勒や菩薩になる唯一の方法とされる。ただし、援助行動を、徳を積むための行動と捉える道親もいる。

布教を生き甲斐とする道親もいる。潘氏は以下のように述べる。

> 道は素晴らしい。多くの人に道を得る機会があるとよいので、家族、親戚、友達を佛堂に呼んで、話を聞いてもらったり、菜食料理を食べてもらったりする。道を得た人だけが無生老母のもとに帰れるから。私の小さな努力で多くの人に道が伝わるとよい。最初は興味がなくても、だんだん興味をもってくれる人もいる。家で経典を読むと、次第にうまく道を説明できるようになってくる。

各種活動に参加し、集団内で様々な役割を担うことで一貫道の理解が深まり、そのことが目的と達成の源泉になると考える回答者もいる。たとえば郭氏は以下のように語る。

> 数年前、朝の儀礼を行うよう潘点伝師（調査対象者の潘氏のこと）に指名された。とても名誉なことだった。でも楽な仕事ではない。「無生老母への三跪九叩頭の礼」のような長くて複雑な式次第を覚える必要がある。間違いは許されない。けれども潘点伝師に指名されたのでどうやって儀礼をよりよくすればよいかがわかった。儀礼が無事終わるたびに達成感がある。

このように、一貫道の知識を向上させること、道徳的人間になること、一貫道の教説を援助行動という形で実現化させることを通じて生き甲斐を感じていることがわかる。

4.4 ソーシャルサポート

宗教はソーシャルキャピタルとして機能することが広く指摘されている［Lim and Putnam 2010］。宗教的な仲間は同じ宗教的世界観を共有し、同じ規範や倫理に従う仲間でもある。こうした仲間の間で生まれる集合的アイデンティティーは、社会的統合、ネットワーク、信頼性、互酬性の大きな基盤となる（結束型ソーシャルキャピタル）。同時に宗教は、ボランティア活動への参加などを促し、宗教的な仲間を超えて様々な人とつながる源泉ともなりうる（橋渡型ソーシャルキャピタル）。この 2 種類のソーシャルキャピタルが、高齢者の SWB に関連する。

4.4.1 社会的統合――結束型ソーシャルキャピタル――

道親は宗教的アイデンティティーや世界観が社会的統合に対して正の影響をもつことを語る。インタビューの中では、ネットワーク、信頼、互酬性を得ることがしばしば語られる。配偶者や友人、子供などとの関係が徐々に減少していく高齢者にとって宗教を通じた社会的統合は重要である。

一貫道における社会的結束は 1）師匠―弟子関係、2）前賢―後学関係という 2 種類の水平的・階層的関係によって維持される。「前賢」と「後学」は年齢に基づく上下関係ではなく得道をした順に基づくものである。これらの関係性は華人系宗教においてしばしばみられる伝統的な関係性である。これら 2 つの関係性が、無生老母のもとで結束することと相まって、道親の間で強固なネットワークを形成する。ネットワークは点伝師から弟子たちに広がり、さらに前賢から後学に広がる。このネットワークは家族ネットワークと似ており、点伝師が弟子たちを子供のように面倒を見、弟子たちの間で兄弟姉妹のような関係を結ぶ。「無生老母の子供たち」や「道親」といった言葉が使用される。

統合を強める第 1 の要因は師匠―弟子関係である。点伝師は佛堂の代表者であり、無生老母から与えられた神通力をもっていると考えられている。得道式の際に、点伝師は無生老母から弟子に道を受け渡し、弟子たちの道親としての生活やその他の日常生活の面倒も見る。点伝師は弟子たちから尊敬され、親や教師のように扱われる。弟子は点伝師に様々な悩みなどを相談する機会が与えられ、点伝師に対して大きな信頼を寄せる。

白氏は結婚生活の問題を解決してくれた経験から点伝師に対して特に感謝の念をもっており、点伝師について以下のように語る。

> 点伝師は弟子たちを自分の子供のように思う母親のようなものだ。厳しくて、間違いを指摘し、怠けていると叱るけれども、弟子たちのためを思ってやっている。弟子たちみんなに道を得て、無生老母のもとに帰ってほしいからだ。家族の問題で一貫道をやめようと思った時、点伝師は一貫道に留まるように私を諭し、夫との間の問題をどう解決したらよいのかを教えてくれた。夫も佛堂に来るようになった。点伝師は私たち家族を助けてくれた。私たちが困難に直面すると、点伝師は辛抱強くアドバイスをくれる。もう 80 歳を超えているけれども、私

たちがしてきたことをよく覚えていてくれる。感謝しても感謝しきれないと思う（涙を流す）。

同様のことは、郭氏の以下の語りにも見受けられる。「佛堂に通った約 12 年間、点伝師はいつも私に目を掛けてくれ、多くの弟子がいるのに、私の成長を見守ってくれた。点伝師は弟子を見捨てたことがない。点伝師をとても尊敬している。家族のように接してくれる母親のようだと思う」。

統合を強める第 2 の要因は前賢―後学関係である。前賢は知識、経験ともに豊富であり、後学によって敬われる。多くの道親は、互いにフラットな関係で交流するが、前賢は後学に対して指導などで様々な役割を担う。譚氏は、前賢との関係について、「前賢は自分の経験を私たちと共有する。菜食料理をおごってくれたりする。私より知識や経験が豊富だけれども、私より偉い人間だと思ったりはしない。信頼できる人だ。肌に問題があった時は、九龍の漢方医を紹介してもらった」と語る。

ここからは前賢―後学関係、特に前者が後者を様々な形でサポートすることによってソーシャルサポートが生じることがうかがわれる。

徐氏は一貫道で得たサポートがいかに自身の人生を変えたかを語る。

ずっとギャンブルに夢中になっていた。競馬、麻雀、トランプなどだ。稼ぎのほとんどをギャンブルに使った。２年前に退職したが、それでもギャンブルをやめなかった。面白すぎて少ない掛け金で大金を稼げると思っていた。いつも勝てるわけではないのは当たり前で、すったことの方が多かった。でもすった分を取り戻せると思っていた。負けるほど取り戻したくなる。ある日、とうとうギャンブルのことで妻と喧嘩になった。ひどい口論になり妻は離婚したいと言い出した。最初は私も怒ったけど、そのうち後悔し始めた。こんなに良い妻が離れていくのは嫌だ。その時から生活を変えたいと思うようになった。ちょうどタイミングよく、隣人がある朝訪ねてきて、菜食料理に招待してくれて、弥勒を拝んでみないかと勧めてくれた。自分を変えるチャンスだと思って、その隣人と佛堂に行き、道を実践することにした。

点伝師や他の前賢はみんな正直で、親切で、いろいろなことを教えてくれて、とても良い達だった。前賢たちと一緒にいると自分が変化していくことがはっきりとわかった。佛堂にいつもいて、前賢たちと

古典のことを語りあい、道理のことがだんだんわかるようになった。道を受けてからギャンブルをすぐにやめ、悪いギャンブル仲間たちとは会わないようになった。良い行いをして、悪い行いをするのをやめるようにした。前賢は、ギャンブルの楽しみは一時の楽しみだという。そういう楽しみではなくて、永遠に続く幸せを求めた方が良い。結局、ギャンブルを断つことができて、今度は私が自分の経験を後学たちと共有する番だ。

高齢者は他の人に助けを求めることを遠慮しているかもしれない。特に悪い行いを正したり、自分の弱さを他人に教えたりする場合はそうである。それは高齢者のプライドの問題にかかるかもしれない。徐氏の場合、一貫道の仲間が重要なソーシャルサポートとなっている。経験豊富で、かつ同じ宗教的世界観をもつ前賢とともに経験を共有しあえるためである。そのため、他の道親に助けを求めることには、遠慮の感覚がそれほど強くない。佛堂の中の閉じられたネットワークによって、ギャンブルや悪い仲間たちとの関係を断つことができたわけである。

前賢―後学関係に加えて、「無生老母の子供」「道親」という関係性もある。このような家族的関係が互助的機能をもつ。たとえば張氏は「みんな無生老母の子供だ。だから『道親』と呼ばれる。兄弟姉妹同士助け合うのは自然なこと。仲間に良いことをすることは自分に良いことをすることと同じだ」と語る。

以上をまとめると、一貫道の佛堂は高齢道親にとって、緊密な関係性、家族的関係性を築く結束型ソーシャルキャピタルとなっている可能性がある。

4.4.2 社会参加――橋渡型ソーシャルキャピタル――

宗教は信者の各種社会活動への参加を促すことがしばしば指摘されている。社会活動への参加を通じて、信者は道徳的・精神的成長を経験し、自らの活動が社会を良くし、布教に貢献することを実感する。一貫道の場合も、一貫道の教説が、教団内外問わず、高齢者の多様な社会活動参加を促している可能性が示唆される。

調査結果からは、高齢者はケアの受け手であり、非活動的であるという

ステレオタイプがあまり実態にそぐわないことがわかる。少なからぬ調査対象者が、過去 1 年間の間に、病院や高齢者がんセンターへの慰問など様々なボランティア活動に参加していた。一貫道以外の世俗的なボランティア団体に所属したり、日常生活のなかで援助行動を行ったりする調査対象者もいた。調査対象者は高齢だが、清掃や工芸、料理などの軽作業に参加可能である。こうした軽作業を行わない場合も、人の話し相手になるなどの活動をしている。

梁氏は約 30 年、道親を務めている。一貫道を学ぶにつれて利他的感情をもつようになり、援助行動はその対象者の利益になるのみならず、自分や広く社会一般の利益になることを強く思うようになった。そのため家族や親戚、友人に援助行動を行うのみならず、地域で組織されているボランティア団体にも参加し、そこで高齢者施設や病院の慰問などを行っている。「一歩前に進んで社会に参加する」ことの重要性を述べ、個人個人の「小さな活動」の積み重ねが、世の中をより良く変えていくことになると述べる。

> 宗教は個人的だけれども、社会的でもある。仏教では「七重の塔を建立するよりも 1 つの命を救う方が尊い」と教えている。いくら古典を学習しても、それをもとに人助けをしなければ本当に理解できていない。日々の中で、家から外に出て、歩み出し、人々を助ける、そしてボランティア活動をして、社会に参加する。それこそが菩薩が求めることではないか。一人一人ができることは小さいかもしれないけれども、積み重なれば大きな力になる。誰かを助ければ、その人と友達になれるかもしれないし、最悪の場合にも敵にはならない。いつかきっと、助けてくれたことに対してお返しをしてくれるかもしれない。

梁氏によると、社会に参加し、援助行動を行うことは一貫道の神髄である。多くの人がボランティア活動に参加すれば、積み上げられる徳も増えて、社会全体を大きく改善させるということを信じている。こうした価値観が社会参加を促す要因となっていると思われる。

楊氏は地域の高齢者施設で、ボランティア活動を行ってきた。旧正月や中秋節での様々なイベントを企画、食事作りなどの活動である。その施設で見た高齢者たちの笑顔をよく覚えているという。

ある中秋節の時に、みんなでお年寄りに月餅を配った。とても喜んでくれた。若い人達はお年寄りと一緒に歌ったりゲームをしたりした。次の機会に行くと、みんな私の名前を憶えていて笑顔で迎えてくれた。人との関係というものはこうして生まれていくもので、小さなことではあるけれどもその結びつきはとてもしっかりしている。高齢者施設でしたことは小さなことだけれども、私たちもうれしかったし、お年寄りたちも喜んでくれた。世の中の多くの人がもっとボランティア活動をすれば、もっと多くの人たちが助けられて、幸せになる。私も自分の徳を積んで、過去の悪い業を消し、世の中を良くしていくことができる。

以上の語りからは、どちらの調査対象者も、個人で行えることは小さいものの、それが積み重なることで大きな力になると述べている。またボランティア活動者と受益者の双方が幸福感を感じることも述べている。ボランティア活動に参加することは、参加する本人にとっても、社会にとっても大きなメリットであり、社会全体の改善する方法であると認識されている。これが道親がボランティア活動を継続する要因の 1 つと考えられる。

また、功徳観や社会を改善しようとする志向性を提唱する一貫道の教義の影響により高齢道親は世俗団体のボランティア活動へも参加する傾向にある。そして社会貢献感、ソーシャルサポートを多様化させる橋渡し型ソーシャルキャピタルを蓄積できるため、SWB の向上と結びつく可能性がある。この結果は表 1 で触れた、特に 65 歳以上において宗教団体と世俗団体の両方に所属することが SWB の高さと結びつくという結果にも沿っている。

5. おわりに

香港の高齢化は急速に進み、どのように高齢者の SWB を維持するのかという問題が重要なテーマとなっている。本稿では一貫道の高齢道親へのインタビュー調査からこのテーマを扱った。香港の高齢化の現況を概観した後に、SWB に関する近年の議論を整理し、調査結果を分析した。調査からは一貫道が高齢道親の SWB と関連している可能性が示唆された。

死後の世界への不安、神仏の守護、目的感覚、ソーシャルサポートの 4

つが一貫道を通じて満たされている。具体的には 1）無生老母への信仰が死への不安感を軽減し、死後の世界に対してよりポジティブなイメージを形成する、2）困難時・不幸時には無生老母やその他の神格によって守られるという感覚を得る、3）道徳、学習、援助行動、布教活動などを通じて、生き甲斐を見出す、4）佛堂内の道親間ネットワーク（家族、親族、前賢―後学関係）と無生老母への信仰が結びつき、社会統合と互助が促される。信頼と互酬性を伴うネットワークに包摂されることで高齢者の社会的欲求が満たされる。一貫道の教説によって高齢者は、ボランティア活動に参加する。これは一貫道の教説を援助行動という具体的な形にすることが重要視されているためである。

ただしこうした知見が一貫道に比較的特徴的なのかどうかについては慎重にならなければならない。香港にはこの点を確認できるデータセットがないため、傍証として、上述した 2009 年実施「台湾社会変遷基本調査」宗教・文化モジュールの二次分析を行った。

まず死後の世界を信じることについては、「生まれ変わり」の存在について信じる度合いの平均値を信仰別で比較したところ（選択肢は「1：強く信じる」「2：まあまあ信じる」「3：あまり信じない」「4：まったく信者ない」の 4 件法で尋ねた設問で、1 を 100、2 を 75、3 を 50、4 を 25 に変換した）。結果は表 4 の通りである（ケース数は表 2 とほぼ同じであるため省略）。

表 4「生まれ変わり」の存在を信じる程度（台湾社会変遷基本調査 2009 年）

	一貫道	仏教	キリスト教	道教	民間信仰	無宗教
65 歳以上	87.5	84.3	43.8	68.4	68.1	45.6
64 歳以下	79.5	74.1	54.1	69.9	67.5	60/8

次に「生き甲斐」（「人生には意味はない」という意識に対して、「1：非常にそう思う」「2：どちらかといえばそう思う」「3：どちらともいえない」「4：どちらかといえばそう思わない」「5：まったくそう思わない」の 4 件法で尋ね、5 を 100、4 を 75、3 を 50、2 を 25、1 を 0 に変換した）の平均値を信仰別で比較した。結果は表 4 の通りである（ケース数は表 2、表 4 とほぼ同じであるため省略）。

表 5「生き甲斐」を感じる度合い（台湾社会変遷基本調査 2009 年）

	一貫道	仏教	キリスト教	道教	民間信仰	無宗教
65 歳以上	43.8	37.5	43.3	43.3	40.7	33.6
64 歳以下	27.8	25.3	23.0	26.4	27.8	24.1

以上の点から、死後の世界や生き甲斐などは必ずしもどの宗教も同じように提供しているわけではなく、高齢者においては特に一貫道と相対的に強く結びついている可能性が示唆される。

本稿には限界がある。第 1 に本稿の調査対象者は現在の道親のみであり、道親をやめた人々が対象に含まれていない。すでにやめた人々は一貫道から得られるメリットが少ないという理由でやめた可能性があるため、SWB との関係を検討する際には両者を比較する必要がある。

第 2 に道親は、意識的であれ無意識的であれ、一貫道の教説や活動を多分に肯定的に評価している可能性がある。そのため宗教と SWB の間のポジティブな関係が高く見積もられていることも否定できない。両者の関係は、道親による自分の人生や幸福感に対する主観的な評価や語りであり、明確な因果関係そのものを示しているわけではないことにも留意する必要がある。

こうした限界がありつつも、本稿には以下のような意義がある。第 1 に事例として取り上げた一貫道では死後の世界、生き甲斐といった高齢者のニーズをある程度満たしていると考えられる。高齢者の SWB を論じる上では世俗的団体に加えて宗教団体にも着目する必要があると思われる。

第 2 に高齢者のこうした心理的ニーズに加えて、一貫道では社会参加の機会やソーシャルサポートも提供している。高齢者の場合、病気や体力の低下など身体機能の低下を抱え、それとともに様々な社会参加の機会も徐々に減少していく。そうしたなかこうした宗教団体に参加することによって各種社会活動への参加の機会を得たり、信者間のソーシャルサポートを得たりすることが可能となると思われる。本稿は一貫道という宗教団体がどのように高齢者にネットワークを提供しているかを示すものである。そしてこうした宗教団体の機能は、特に香港のような高齢化社会において重要であることを本稿は示唆している。

今後の課題としては以下の 2 点が考えられる。第 1 に一貫道以外の様々

な宗教（無宗教も含む）の高齢信徒へのインタビューを行ことで、宗教の違いが SWB の違いとどのように結び付くのかを検討する必要がある。第 2 に香港の一貫道の高齢者において宗教が SWB の高さと結びついている可能性が示唆されたが、同様のことが中国、台湾、日本など一貫道についてもあてはまるのかどうかを検討する必要がある。こうした課題を検討することによって、香港の高齢者における宗教と SWB の関係、さらには東アジアにおける一貫道の高齢道親と SWB の関係をより明確かつ包括的に理解することができるようになるだろう。

高齢化は、香港のみならず、中国、台湾、韓国、日本など様々なアジア社会が直面している大きな社会変動である。SWB を含め、高齢者の身体的・精神的健康をどのように維持し、向上させるかという課題はいずれの社会においても重要な社会的課題である。宗教という文化的要因が高齢者の健康にどう関連しているかを明らかにすることは、こうした社会的課題を論じる上でも不可欠である。宗教が当該社会でどのような役割を担ってきたのかを理解する上でも重要な課題になりうると思われる。

【付記】

本研究では「台湾社会変遷基本調査」の第 5 期第 5 次調査データを使用した。「台湾社会変遷基本調査」の調査主体は中央研究院社会学研究所（台湾）であり（第 3 期第 1 次調査以前の調査主体は台湾中央研究院民族学研究所）、中華民国行政院国家科学委員会の支援を受けている。本研究は日本学術振興会科学研究費（基盤研究 B）「東アジアにおける宗教多元化と宗教政策の比較社会学的研究」（研究代表者：櫻井義秀）、および日本学術振興会科学研究費（若手研究 B）「台湾における宗教と利他主義に関する社会学的研究」（研究代表者：寺沢重法）の一貫として行われたものである。

註

(1) 中大香港亞太研究所［2013］の調査によると、子どもをもたない主な理由として、「経済的問題」「住居の問題（住居費の高さや住居の狭さ）」、「教育の問題」などが挙げられている。

(2) 精神的資本とは、「ライフコースを通じて増加、減少する精神的な貯蓄」［Cooper et al. 2009: xxvii］を意味する。

(3) 一貫道の「道統」（公式的歴史）によると、道は無生老母からもたらされ、現在まで 68 人の聖人がそれを継承しているという。具体的には、道はまず盤古に伝えられ、最終的には 1912 年に第 68 代目の聖人である張天然に継承された。さ

らに道統には老子、孔子、釈迦なども含まれる。道の系統は華人でありつつも、こうしてしばしば釈迦などの非華人も包摂する。

(4) 中国語では「地府抽名、天榜掛號」という。

(5) 香港の正確な道親数は明らかにされていないため、調査をもとにおおよその道親数を推定した。まず全佛堂が各種祭りで菜食ブースを設ける。そのなかの約 70%（140 箇所）が小規模で約 30%（60 箇所）が大規模である。大規模な佛堂は約 70 席、小規模な佛堂は約 10 席を収容可能である。1 席あたり 12 人が着席可能である。ブースを訪れる人の多くは道親、非道親含めた家族とともに訪れる。各席には約 3 人の非道親が着席する。これらを合わせると、おおよそ 50400 人の道親になる（(140×10×9）＋（60×70×9)）。これは香港全人口（約 700 万人）の 1%未満に相当する。この道親数は、1980 年代の推定道親数（50000 人）に近い［中華民國一貫道總會 1998］。1997 年の香港返還前後には道親数の減少があったと推察される。より正確な道親数の把握は今後の課題である。

参考文献

Boey, K. W. 2003 “Religiosity and Psychological Well-being of Older Women in Hong Kong.” *The International Journal of Psychiatric Nursing Research* 8(2):921-35.

Bradshaw, Matt, Christopher G. Ellison, Qijuan Fang and Collin Mueller 2014 “Listening to Religious Music and Mental Health in Later Life.” *The Gerontologist.* Advance Access.

Chen, Joseph J. F. 2005. *I-kuan Tao*. Bloomington: Authorhouse.

Cooper, Cary L., Field, J., Goswami, U., Jenkins, R., and Sahakian, B. (Eds.) 2009 *Mental Capital and Wellbeing*. Oxford: Wiley Blackwell.

Cooper, CaryL., and Robertson, I. (Eds.) 2013 *Management and Happiness*. Cheltenham: Edward Elgar Publishing.

Diener, Edward. 1984 “Subjective Well-being.” *Psychological Bulletin* 95:542-575.

Ellison, Christopher G., David A. Gay, and Thomas A. Glass 1989 “Does Religious Commitment Contribute to Individual Life Satisfaction?” *Social Forces* 68: 100-23.

Foley, Daniel P. 1988 “Eleven Interpretations of Personal Suffering.” *Journal of Religion and Health* 27:321-28.

Idler, Ellen L. 1987 “Religious Involvement and the Health of the Elderly: Some Hypotheses and an Initial Test.” *Social Forces* 66:226-38.

Jordan, David K. and Overmyer, Daniel L. 1986. *The Flying Phoenix: Aspects of Chinese Sectarianism in Taiwan*. Princeton: Princeton University Press.

Krause, Neal 2011 “Reported Contact with the Dead, Religious Involvement, and Death Anxiety in Late Life.” *Review of Religious Research* 52(4): 347-364.

Levin, Jeffrey S. and Harold Y. Vanderpool 1987 “Is Frequent Religious Attendance Really Conducive to Better Health? Toward an Epidemiology of Religion.” *Social Science and Medicine* 24: 589-600.

Liao, Pei-Shan, Yang-Chih Fu, and Chin-Chun Yi 2005“Perceived Quality of Life in Taiwan and Hong Kong:An Intra-Culture Comparison.” *Journal of Happiness Studies* 6(1):

43-67.

Lim, Chaeyooon and Robert D. Putnam 2010 “Religion, Social Networks, and Life Satisfaction.” *American Sociological Review* 75(6): 914-933.

Lu, Yunfeng. 2008 *The Transformation of Yiguan Dao in Taiwan Adapting to a Changing Religious Economy*. Lanham: Lexington Books.

Manton, Kenneth I. and Julian Rappaport 1984 “Empowerment in a Religious Setting: A Multivariate Investigation.” *Prevention in Human Services* 2:37-74.

Manton, Kenneth I. 1987 “Patterns and Psychological Correlates of Material Support within a Religious Setting: the Bidirectional Support Hypothesis.” *American Journal of Community Psychology* 15: 185-207.

McIntosh, William Alex and Jon O. Alston 1982 “Lenski Revisited: The Linkage Role of Religion in Primary and Secondary Groups.” *American Journal of Sociology* 87: 852-82.

Ng, Ka-Shing 2014 “Yiguan Dao in Hong Kong : A Case Study of its Organizational Characteristics and Conversion Experiences of Adherents.” *Journal of the Graduate School of Letters* 9:41-53.

Pargament, Kenneth 1997 *The Psychology of Religion and Coping: Theory, Research, Practice*. New York: Guilford Publications.

Pollner, Melvin 1989 “Diving Relations, Social relations, and Well-being.” *Journal of Health and Social Behavior* 30:92-104.

Rote, Sunshine, Terrence D. Hill and Christopher G. Ellison 2012 “Religious Attendance and Loneliness in Later Life.” *The Gerontologist* 53(1):39-50.

Schiman, Scott, Alex Bierman and Christopher G.Ellison 2010“Religious Involvement, Beliefs About God, and the Sense of Mattering Among Older Adults.” *Journal for the Scientific Study of Religion* 49(3):517-535.

Siu, Oi-Ling and David R. Phillips 2002 “A Study of Family Support, Friendship, and Psychological Well-being Among Older Women in Hong Kong.” *International Journal of Aging and Human Development* 55 (4): 299-319.

Soo, Khin-Wah 1997 *A Study of the Yiguan Dao (Unity Sect) and Its Development in Peninsular Malaysia*. PhD Dissertation, University of British Columbia.

Taylor, Robert J. and Linda C. Chatters 1988 “Church Members as a Source of Informal Social Support.” *Review of Religious Research* 30:193-202.

Watson, Paul J., Ronald J. Morris, and Ralph W. Hood 1998 “Sin and Self-functioning, Part II: Grace, Guilt, and Psychological Adjustment.” *Journal of Psychology and Theology* 16:270-81.

香港賽馬會防止自殺研究中心 2014『傅媒通訊錄』

（http://csrp.hku.hk/WEB/eng/statistics.asp、2015 年 1 月 27 日閱覽）。

香港政府 2013『2013 年第三季經濟報告』

（http://www.hkeconomy.gov.hk/en/pdf/er_13q3.pdf 、2015 年 1 月 27 日閱覽）。

香港政府統計處 2012『香港人口推算 2012–2041』
（http://www.statistics.gov.hk/pub/B1120015052012XXXXB0100.pdf、2015 年 1 月 27 日閲覧）。
中大香港亞太研究所 2013『港人實際生育率未如理想 政府宜加強家庭福利支援及家庭友善政策鼓勵生育』
（http://www.cuhk.edu.hk/hkiaps/tellab/pdf/telepress/13/SP_Nov2013_Press.pdf、2015 年 1 月 27 日閲覧）。
中華民國一貫道總會編 1988『一貫道簡介』台南、龍巨書局。